
異世界の漫食ピョン？

先駆ミヤマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の浸食ピョン？

【Nコード】

N8552P

【作者名】

先駆ミヤマ

【あらすじ】

突如始まった怪事件それを巡りガンダムの世界が動き出す。

（前書き）

ともかくカオス。少し遅れての年賀状小説を送ります。中身はクロ
スオーバー。ソレスタやプリペンダー等々も最後の戦いによってテ
ロ活動を一切やらないことによって存在を認められている。（ソレ
スタはすでに解体済み。今回登場の刹那はダブルオーライザーは自
分で所持しているだけ。）

一体なぜこうなったのだろうか？人間同士の争いが減ったのにも関わらず…しかもこの時期に起こった謎の事件。人が機械にハグされる…。このわけのわからぬ怪事件は2010年の終わりの直前に起こったのであった。

オーブ首相邸…

『お久しぶりです、カガリさん。』

相手は久しぶりに地球でサンドキングダムで休暇を過ごしているリリーナからだった。

「久しぶり。普通に話すのはな。」

さらに通信に加わったのはアザデイスタンのマリナだ。

『お招きいただきありがとうございます。』

さらに通信者は加わっていき…。

「これで、全員ですね。」

同じく休暇の時にいたラクスがカガリの隣に座った。

『内容は例の事件のことだろ？残念だが我々のアクシズではそんなことは起きていない。』

彼らが今回連絡を取り合うのは地球上で起きているある事件のこと……。

『よしなに。わたくしの所ではポッドが飛び跳ねることもありました。』

『ラクスさんのところではこういうことはないのですか？』

ラクスは少し首をかしげ首を横に振った。

「プラントではそういうことはありません。昨日地球に降りて初めて知りましたわ。」

物が飛び跳ねる。人に抱きつく。この事件によって地球上の金融も大打撃を受け静かな年末を人々は過ごしていた……。骨を折るところまではいかないがけを負う人も何人かいた。彼女らはこの会議の時大晦日の時に集合を決めた。

大晦日の朝、事態は一変する。元地球連邦軍、現地球防衛軍大将ブライト・ノアのもとに一本の連絡が入った。

「何！？アンノウンMSが300以上だと！」

一兵士はそのあとアジア大陸に展開するデータを見せた。映像には町を狙った攻撃がアンノウンMSから放たれ防衛の軍がシールドを使い防いでいた。

「被害状況は！？」

「今のところありません！ですが防衛のMSが守りきれるまで…せいぜい30分！」

扉が開きアムロも入ってきた。

「ブライト、いきなりの呼び出しだがどうした？」

「アジアでアンノウンが出た。すぐに向かってほしい。他のツインキーとの連絡はとれるか！？」

「まだ、とれません！最短距離でも目標地点まで」

最短距離が1時間もかかってしまうがそれでも向かうしかない。なぜなら彼らは本当の意味で世界を守るために戦うと誓った戦士なのだから。だがこの時この事件の背後に潜む理由を誰も知らない。

助けて…助けて……。僕は逃げていた。町を、野を、海の上を飛び跳ねながら逃げて逃げて…でも僕はこの星からは逃げられない。どうしよう…なんで、こんなことに……。

世界中で現れては碎かれる動物の姿をしたMS。フィンファンネルは全て飛び出しアムロの周りを駆けていく。

「くそ！数が多すぎる…！」

防衛軍のMSにはB・K・Dという装甲を守るシステムがあるが敵にはないらしい。ビームに当たれば爆発して地上に散っていく。

「アムロ少佐、援護します！」

「頼むぞ！」

「一匹も逃すかって！」

新装されたガンダム4号機が直線状でエネルギーを溜め、5号機がガトリングで撃ち落としていく。6号機がビームキャノン、ライフル、バスターの合計5つの砲口から光が放たれる。

「くらえ！」

「堕ちろ！」

ブルーデスティニー3号機がビームサーベルを振りかざし、ミサイルを放つ。

アムロ達がようやくついたとき敵は町の一部分のみを攻撃していた。無差別攻撃と思ったら的を得たかのようにどこかを正確に攻撃していた。

「くっ、すぐに攻撃を開始しろ！」

「やってます！！」

ミサイルに、弾幕を張り通り過ぎる敵を落としていく。あまりにもあっけなく。町を攻撃しているのにそれらは援軍に來た戦艦には全

く興味を示していないのだ。

「おかしい…何か変だ。」

「ああ。」

「ようやくつながりました!!」

『こちらツインキーオーブ支部よりカガリ・ユラ・アスハだ。何があつた?』

「何度も連絡したぞ!アンノウンMSがアジアで…。」

『いや、ヨーロッパで大暴れしてるぞ!?』

それを聞いたブライトは艦長席で叫んだ。

「何!!!!????」

そんなころヨーロッパ郊外の町。小さな家で少女は震えていた。ティファである。

「何かが来てる…。」

現恋人のガロードにとっては死活問題の発言を彼女はした。

「何かって…何だよ、ティファ。」

「分からない。だけどその子も怖がってくる…。はっ…来ます!」

ガラスの割れる音とともに何かが入ってくる音を確認にガロードも聞いた。

「誰だ!？」

「…そこ!」

指先には何もいなかった。だがガロードは飛びついた。そして…。それは悲鳴を上げた。

「キイイイイ!!!!!」

「なっ、なんだこいつ?」

だが同時に町も揺れる。

「ガロード!」

ガロードは腕の中の何かに蹴られ離してしまった。

「ぐふっ。」

はたから見ればかなりシュールな光景だったが。町の揺れは激しくなりガロードは開いているベランダから外に出るとそこには…。

「フクロウ!? 狼に…鷹!？」

ガロードが見ても丸わかりなフォルムをしたMS達。それは人が作ったようなものではなかった。

「ガロード、気をつけて。あれからは強い憎しみを感じる。」

「ああ！GXデバイダー！行くぜ！！」

ラストイニーマーメイルを空に放り投げ…天から突如落ちてくるGXデバイダー。ガロードはそれに乗り込み自分たちの家に銃を向けた。

同じくそのころ。ガンダムに乗り待機する二人の男あり。一人天使の翼のガンダムに乗る。一人二つの可能性の光のドライブを持つガンダムに乗る。ヨーロッパに現れた敵を討つために飛び出した。

「ティファにもこの街にも手は出させねえ！！！」

ガロードの叫びと銃口から飛び出す玉。レーザー砲やバルカン砲を破壊していく。ビームマシンガンが乱射しつつも武装だけを破壊していたが降りたつ二つの天使はそのMSを完全に消滅させていく。

「ヒロ！刹那！」

「ガロード、あれに人はいない。町を襲っている以上全て撃ち落とさない。」

「…ガロード、ティファはやつらから何か感じたとか言ってなかったか？」

刹那はイノベーター。だからニュータイプと同じように心や思いが勝手に伝わってくる。だから、何かを感じていた。それでガロードに尋ねたのだった。

「そっぴや…言つてたな。」

鷹から翼のところからばらまかれる弾幕を避けながら反撃。フクロウはその鋭い爪を開いて急接近してくる。狼もキバを見せて躍りかった。GX、ウイングカスタム、ダブルオーライザーはそれぞれのビームサーベルを振るいビームを放ち町に被害を出すまいと尽力する。

「…トランザムライザーを使い交渉を試みる。」

「わかつた。」

「了解。」

GXはティファをコックピットに乗せてから距離をとる。

「…よし。トランザムライザー！！！！！！」

ダブルオーライザーは赤く光り同じ光の粒子を辺りにまいた。

「大丈夫でしょうか？」

赤い光を見てリリーナの問いにマリナは答えた。

「きつと、大丈夫です。刹那が頑張っているから。」

腕を組み最も信頼できる彼にできることは信じることだけだった。

「お前たちは何故町を破壊しようとする!？」

ワレワレハオツテイル
ソノモノヲコロス
ソレ

ダケガノゾミ
アノコザカシイチイサナウサギヲ

「ウサギ？」

アムロがこの時刹那に問いかけてきた。

（刹那！敵のことがわかったか！？）

（ああ。ウサギを探しているらしい。）

コノセカイニモヒガイガデル

モノガトビハネル

ソ

レガウサギノトオツタアトダ

「物が飛び跳ねるのが…ウサギが通った後…？」

「ならなぜそのウサギを殺そうとする!？」

ブライトは地球上のツインキーの中でニュータイプと思われるメン
バーをヨーロッパに集結させておりZ、ZZ、V2などのMSも集
まっていた。

アノウサギはワレワレノほうがフサワシイノニモカカワラズ牛のウ
エニノツテ千支のチイヲウバッタノダ!!!!!!!!!!!!!!!!!!

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

あまりにもばかげた理由で啞然となった。この後、ブライト艦長や力
ガリ、ラクス、ハマーンは集められるだけのツインキーを集め……
……。後は音声でお楽しみください。

ドガ!!バキ!!バシュ!!ザク!!グシュ!!グサツ!!
!ドギヤアアン!!!!!!!!!!

もはや夜中になり元旦まで数分を切ったところで千支の精霊だった
ウサギをある海岸線まで送り届けた。

「いろいろとご迷惑をかけましたことをお詫び申し上げます。たぶ
ん、あいつらも2度と来ないと思いますし……。」

トランザムライザーによって白いウサギは一時的に実体化しツイン
キーメンバーにぺこぺこ頭を下げていた。

「もうこんなことは勘弁だぞ。」

「はい。本当にごめんなさい。」

時計の長針ももうすぐ12を指そうとしていた。

「ええっと……やること終わったら一つ、お礼をさせてください。」

海から何かが歩いてくる。牛だ。よく見るような牛がゆっくりと歩いてくる。ちょうど全てが12を指し年が変わった直後ウサギは牛から何かを受け取った。

「では、皆さん。よいお年を。」

ウサギは海の上を飛び跳ねながら地平線の彼方へ消えていく。そしてあの小さなウサギの恩返しは始まった。

「うわあ。」

「きれい……。」

太陽が昇ってきたのだ。時を越えたわけではない。彼らだけに海から昇る朝日を見せたのだった。太陽の光が海面に反射しちょうどいい加減で全員の目にささった。

（後書き）

なんだこれ……。自分でも作ってから思いました。一体何をさせたかったのか分からない。まあ、これだけは言いたい。

「皆様！あけましておめでとうございますあけましておめでとうございます！！今年もよろしく願います。今年は私が受験なものであまり投稿はできませんが先駆ミヤマ一生懸命頑張ります！！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8552p/>

異世界の浸食ピョン？

2011年1月8日20時35分発行